

保育実践力の育成に関する考察3 — 「実習指導室」の「横断性」 —

Consideration about the nurture of practical abilities of early childhood care and education 3
— "Commonality" of "Practical Training Room" —

安部 孝
(こども学科 准教授)

原田 智鶴
(実習指導室 実習助手)

石山 貴章
(九州ルーテル学院大学 教授)

要旨 保育者養成において効果的な実習指導を講じる上で、学生が受けている指導・支援の内容やその意味をとらえ直すことが必要と考える。

そこで本研究では、学生が日常的に活用する「実習指導室」に着目し、アンケートの回答に見られる学生の利用目的・理由と、「実習指導室」担当者の業務内容やそこでの対応事例との関係から、「実習指導室」の機能とそこで展開される人間的な働きとしての機能や意味を明らかにした。また、複数領域の実習で活用される「実習指導室」の機能を、「横断性」という視点でとらえることで、実習指導・支援の在り方を総合的に構築する手掛かりについて考察した。

【キーワード：保育者養成 実習指導室 横断性】

1. はじめに

1. 課題意識

教育・保育実習は、学生が教育・保育現場で直接に教育・保育を経験する機会である。実習に臨む学生の思いは期待と不安が入り混じった複雑な状態にあり¹⁾、それを解決し乗り越えるための指導や支援は学生に専門職に対する期待と展望を抱かせ、将来を切り拓く手掛かりを獲得させるために不可欠な働きであるといえる。そこで、学生の実習への取り組みに対する効果的な指導・支援の手立てを講じる上で、学生が実際にどのように指導・支援を活かしているのかを探り、それらを具体的な場面や機会との関連でとらえなおすことが必要であると考え。

本研究では、まず、学生に対するアンケートから、学生の「実習指導室」における様々な経験を利用目的・理由の視点から整理し、「実習指導室」が学生の学習にどのように機能し、また、指導・支援を通してどのような影響を与えているのかを探る。

さらに、実習指導室担当者（以下、実習助手）の業務や学生へのかかわりを整理し、それを学生

が「実習指導室」を利用する意図と重ね合わせることで、「実習指導室」の機能を、そこで展開される人間的な働きの側面からとらえる。

そして、「実習指導室」の機能から見える保育者養成における実習指導・支援の意味を、保育実践力の育成に関する様々な「横断性」²⁾という視点から眺めることで、「横断性」の概念の新たな構築を試みると共に、効果的な実習指導の手掛かりについて考察を行う。

2. 保育実践力の育成における「横断性」と「実習指導室」の機能への着目

1) 「横断性」への着目

「保育実践力の育成に関する考察1—実習指導における横断性への着目—」³⁾では、保育者としての資質を育成する機会として教育・保育実習に着目し、その学習や指導内容の「横断性」と、学生の学習者としての「横断性」の意味とを明らかにした。

ここでは、学習内容の専門性という領域の区切りによって、学生はその領域間を行き来しながら、自己の内側に専門家としての資質を醸成

させていることや、その専門者としての成長は、日常の生活者としての成長との相互の関係によって成り立っていることを考察した。そして、生活者としての一人の学生の存在は、複数の領域で区切られるものではないと考え、専門者としての資質を高める学習における「領域そのものの非接続、非連続を明確にし、それらを架橋するような指導」⁴⁾の構築を保育者養成における課題として提示した。

このような認識に立ったとき、学習のシステムの中であって、各領域間を横断する働きそのものは学生自身であると考えられ、それゆえ、学生の学習経験や実態を通して領域間の「横断性」や、領域同士を架橋する指導の手掛かりが見えてくると考えられる。

そこで、個々の領域ごとに行われる実習指導や学習のシステムにおける学習者としての学生の姿や認識と、そこに展開する具体的な指導との関係を明らかにすることによって、保育実践力を育成する手掛かりを追究したいと考える。

2) 「実習指導室」への着目

本学においては、学生の「実習指導室」への来訪は日常的であるといつてよい。学生は「実習指導室」で、実習に関する諸手続きを行ったり、学習や作業を進める上での疑問を解決したり、ほかに教員や助手に進路や生活などについて相談したりしている。このように「実習指導室」では、専門的な学習領域における指導・支援と生活上の指導・支援とが展開されており、その意味で「実習指導室」は、学習の専門性によって区切られた複数の領域を行き来する学生にとって、必然的に利用する（…通過し立ち止まる）特殊な“交差領域”となっていると理解することができる。

そこで、領域間を横断する学生が“交差領域”としての「実習指導室」を利用する目的や理由と、その働きに対する期待とを明らかにすることによって、学生に対する実習指導・支援の効果的なあり方やその手掛かりを探っていきいたい考える。

II. 考察の手掛かり … 2つの視点から

本研究における考察の手掛かりとして、「II.-1.」では学生に実施したアンケートについて、また、「II.-2.」では実習助手の業務の実態をもとに「実習指

導室」の業務、役割について、調査内容とそこから導き出された結果とを整理した。

1. 学生の「実習指導室」利用の目的・理由と内容

1) アンケートの実施

アンケートにより、学生の「実習指導室」における様々な経験を、利用目的・理由や内容からとらえ、「実習指導室」が学生の学習にどのように機能しているのかを整理した。

2) アンケートについて

①目的

「実習指導室」についての学生の利用目的・理由や内容を探り、学生にとっての「実習指導室」の働きを理解する。

②対象

- ・本学学生2年生（平成21年度入学生）
実践研究（幼稚園）の受講者74名（回答数55名）

③実施方法

- ・実践研究（幼稚園）の授業（平成22年11月下旬）で実施
- ・回答時間は15分程度とし、「実習指導室」利用についての経験を設問に沿って自由に記述させた。

④設問

「どのようなときに実習指導室を利用しましたか」という経験をたずねる内容を中心に、設問を以下のように設定した。

【アンケート「実習指導について」】

- 1 実習指導室はどのような働き・役割をしていると思いますか。
- 2 実習指導室をどのように利用（たずねたり、作業したり、相談・質問したり）していますか。
- 3 どのようなときに実習指導室を利用しましたか。
 - ①幼稚園実習に関して ②施設実習に関して
 - ③保育所実習に関して ④小学校実習に関して ⑤ほか
 それぞれの利用について、内容を書いてください。
(※自由記述欄)
- 4 実習指導室担当のかかわりについて（自分の経験）を書いてください。
- 5 実習指導室に今後どんな働きや役割を期待しますか。

3) アンケートの回答から

上記のアンケート「実習指導について」の特に「2」と「3」の結果を基にしながら、学生が「実習指導室」を利用する目的や理由を整理し、類似するものを分類し、それらに意味や特徴を表す概念名を付することを試みた。

その結果、「a) 不安なとき」、「b) 指導を受け相談するとき」、「c) 就職の取り組みで」、「d) 情報を得たいとき」、「e) 実習にかかわる連絡・報告で」、「f) 服装や持ち物など準備についての質

間で」、「g) 施設、宿泊について」、「h) 先生とのかかわりや様々な相談で」の8つの概念に分類することができた。これらの学生の目的や理由を各実習ごとに整理すると以下ようになる。

【実習ごとの「実習指導室」の利用目的・理由】

(複数回答あり。55名の回答に記された数)

	a) 不安	b) 指導相談	c) 就職	d) 情報	e) 連絡等	f) 服装	g) 施設	h) 先生
①幼	15	34		6	31	5		a)・b)
②施	13	27		4	31	6	4	a)・b)
③保	14	31		7	30	2		a)・b)
④小	※該当者(回答者)なし							
⑤ほか	5		17					9

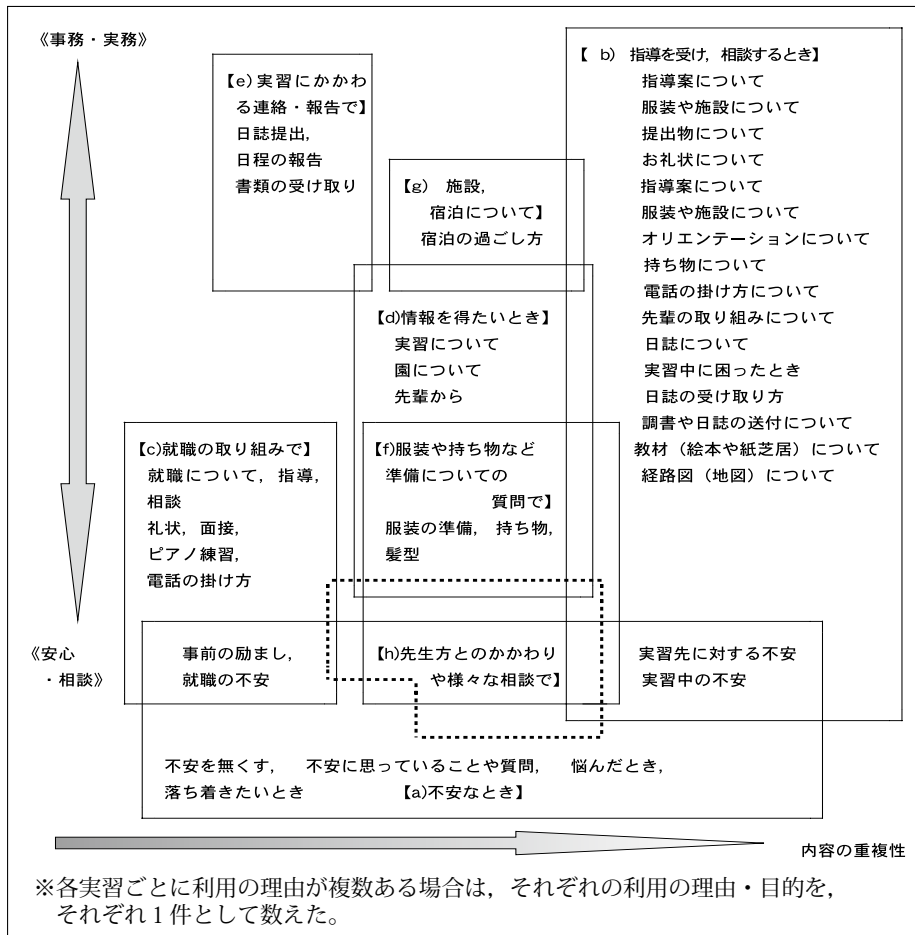
□「h) 先生とのかかわりや様々な相談で」について

アンケートの回答には、「⑤ほか」(実習以外のことで)においても「h)」に該当する具体的な内容の回答(利用目的・理由)が見られ、学生は、実習以外でも教員や助手とのかかわりを期待して実習指導室を訪れていることが分かる。また、「①幼」「②施」「③保」の「a) 不安」「b) 指導相談」は、自ずと教員や実習助手の対応や支援を求めていることになり、そのまま「h)」に該当すると理解し、表のように標記した。

また、これら学生の「実習指導室」を利用する理由は、大きく事務、実務的な用件を目的とする場合(《事務・実務》)と、不安や心配事を相談したりする目的(《安心・相談》)で訪れる

場合とに分けて考えられる。そこでこの2つの理由を両極としてa)~h)の8つの概念をそこに配置することで、学生が「実習指導室」を利用する目的や理由の傾向のイメージ化を試みた。

【実習ごとの「実習指導室」の利用目的・理由】



4) 学生にとっての「実習指導室」の意味

これらから、学生にとっての「実習指導室」の意味は、単なる実習にかかわる事務的な手続きを目的としただけのものではなく、むしろ実習やそれらと関連が深い就職活動に際しての相談や具体的な指導・支援と、それらを通してもたらされる不安感の緩和や解消という機能にもあるととらえることができる。

さて、学生がそうした目的を持って「実習指導室」を訪ねることを考えると、学生たちは来訪に際して、予めそのような結果を予期し、期待をしていると考えられる。つまり、学生たちは日常的に、「実習指導室」で自然に様々なことを学び、経験することで、「実習指導室」の有効な働きを自ずと実習や学生生活上の事情や困難を乗り越えるための手掛かりとして理解し、自分なりに活かしているということが考えられる。

2. 「実習指導室」の機能

ここでは、「実習指導室」の機能を実習助手の業務から眺める。そこでまず、業務が展開される時期と学生の実習への取り組みとのかかわりに着目し、「II .1. 学生の『実習指導室』利用の目的・理由と内容」で明らかになった学生の利用の目的・理由に対する「実習指導室」の機能と具体的な成

果について検討する。そこでは特に、実習指導室担当者（以下、実習助手）⁶がかかわった事例の成果を見取る作業を通して、「実習指導室」の機能としての指導・支援の可能性（有効性）についての考察を行う。

1) 「実習指導室」の機能としての実習助手の業務

実習助手の業務内容は、大きく「実習の事務手続き」と、実習指導にかかわる「学生への対応（指導・支援）」とにとらえることができる。実習は、こども学科の乳幼児保育コース及び、こども学コースの2コースにおける免許・資格取得のための必修である「幼稚園教育実習」、「保育所実習」、「施設実習」、「小学校教育実習」、「介護等体験」の5種類となる。

学生それぞれが所属するコースや選択により、取得する免許・資格が異なり、取り組む実習も異なってくる。実習助手の業務はこれらの実習にかかわる様々な庶務をはじめ、それらに伴った学生への対応（指導・支援）となる。

2) 「実習指導室」の業務（平成22年度）

① 「実習の事務手続き」

「実習の事務手続き」の主な業務には以下のものがある。

【「実習の事務手続き」一覧】

- 「希望調査書」の準備
- 実習先の振り分けと調整
- 麻しん抗体検査及び、「麻しん予防接種証明」の写しの回収
- 実習依頼文送付（依頼書・承諾書・返信用封筒）
- 「実習承諾書」の整理
- 実習一覧表作成（実習先、期間、巡視担当者等）
- 提出物用紙準備（「実習生調査書」、「保険用・巡視用略地図」、「健康チェックシート」準備）
- 実習関係書類送付（「基本実習についてお願い（文書）」「実施要項（文書）」「謝礼金について、返信用封筒・「事故等への対応について」・学生の健康管理について）
- 謝礼金振込口座のまとめ（名簿作成と経理への依頼）
- 日誌の発注
- 学生作成書類等の準備
- オリエンテーション用書類の準備（「出勤表」・「前半評価表」・「評価について：要項」・返信用封筒）
- 巡視担当教員用書類準備（名簿・学生調査書のコピー・巡視報告書出張上申書・昨年度の就職状況一覧）
- 実習先への手みやげの注文
- 実習後の出勤表、評価表のとりまとめ
- お礼状の送付
- 日誌の預かり・保管
- 実習日程の調整（欠席等の事情による調整）
- 実習先からの助言等の電話受付窓口（指導教員への連絡、学生への連絡）

「実習の事務手続き」の業務は、各実習の実施期間、事前・事後指導の時期や内容を踏まえて行われる。それらは、すべて各実習の指導内容とかかわりが深く、実際にはそれぞれの実習の指導教員の指示や実習委員会⁶の意向を受けながら、連携業務として取り組まれる。そして、これらの業務に付随して、学生への対応や指導・支援として、実習の事前事後の段階における学生の疑問や不安等についての相談、実習先からの連絡事項等の伝達や掲示など、学生への周知

や状況に応じた声掛けを行っている。

これらの業務は1年を通し、複数の実習で並行して取り組む必要があり、それは、実習やその準備に取り組む学生の事情と重なっているといえることができる。

そこで、実習の時期と「実習の事務手続き」とを一覧にし、「実習指導室」の機能としての実習助手の業務を視覚的にとらえてみる。実習助手は1年間の中で必ず、いずれかの実習で学生とかかわりを持っていることがわかる。

【実習の時期と「実習の事務手続き」】

月/年次	施設		幼稚園		保育所		小学校/介護等体験	
	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次
4月	承諾書取りまとめ		書類準備・回収 実習先振り分け	書類送付(依頼文)		承諾書取りまとめ 実習一覧作成		書類送付(依頼文) 書類準備回収(調書等)
5月			書類送付(依頼文) 承諾書取りまとめ 実習一覧作成	書類準備、回収、送付、 書類送付(依頼文) オリエンテーション把握		書類送付(依頼文) 書類準備、回収、		
6月			書類準備、回収	幼稚園実習(後期) 礼状送付		細面検査実施 オリエンテーション把握	書類準備、回収、送付	オリエンテーション把握 介護等体験(随時)
7月	書類準備、回収 自習先振り分け 実習一覧作成			評価表等とりまとめ		保育所実習(前半)	希望先の 取りまとめ	オリエンテーション把握 (小)
8月			書類準備、回収、送付、 書類送付(お願い文) オリエンテーション把握			細面検査実施 評価表とりまとめ	内諾書とりまとめ 実習一覧作成	
9月	書類送付		幼稚園実習(前期)			礼状送付		介護等体験(特別支援)
10月	細面検査一覧作成		礼状送付 評価表等とりまとめ			評価表等とりまとめ		小学校教育実習
11月						書類準備、回収 実習先の振り分け		礼状送付 評価表等とりまとめ
12月	書類準備、回収 書類送付(調書等)					書類送付(依頼文)	書類送付	
1月	オリエンテーション 把握実習(随時)							
2月	礼状送付							
3月	評価票等取りまとめ							

②「実習指導室」における学生への対応(指導・支援)

「Ⅱ-1.学生の『実習指導室』利用の目的・理由と内容」では「実習指導室」における指導・支援に、「相談や指導を通じた学生の様々な不安の解消や緩和」の働きを見ることができた。実際の対応場面には、連絡や伝達、その他一般的な指導内容に留まるものから、まさに学生個々

の事情を把握しながら、実習や学生生活に対するモチベーションなどを維持し、課題意識や期待感を持たせるための具体的な支援までもがある。そこで、そうした対応や指導・支援の具体的な事例(実習助手によるかかわり)を「実習指導室」利用の理由・目的の視点から読み取ることで、「実習指導室」で展開される人間的な働きの、指導・支援としての可能性(有効性)を検討する。

【実習助手の「実習指導室」における対応の事例】

【事例1】「ゆっくりと話せる場所」

キーワード/「実習に対する不安」「個別指導」「友人関係」

学生:M 平成19年度入学生

時期:平成21年4月初め~卒業

実習:施設実習:平成20年7月7日~7月19日

保育所実習：前半：平成21年7月6日（月）～7月21日（火）

後半：平成21年7月27日（月）～8月10日（月）

Mは実習室を訪ねた際に、「先生、聞いて」「うん」「分かった」「だってさあ」など、なれ合いの言葉が目立つ学生であった。

器用な性格ではなく、一つの物事に時間をかけて行うことが多かった。

施設実習前は一緒に行く同学年の友人を頼り、当初から困ったら助けてもらおうという姿勢がみられていた。

また、一緒に実習へ行った友人の話によると「施設実習中に寝坊をし、実習宿舎の部屋に数時間こもっていた」という。

本人はその実習で失敗を経験したが、今まで他人に頼ってきたために、自分自身でどう対処したらよいか分からなくなってしまっていた。

その実習後、Mは何度も実習室へ来て助手や教員へ、次に控えている幼稚園実習に対する不安を泣きながら訴えた。「実習へ行きたくない」、さらには「学校を辞めたい」と相談へ来ることがあった。

それらが原因してか、情緒が不安定になり、仲間から「Mが授業中、勝手に怒って部屋を出ていき帰ってしまった」、「Mへ提出物のことを伝えても本人へ伝わらないので、困っている」などの報告があった。

その後、友人関係もうまくいかず、大学を休むことが多くなった。

Mの不安は、施設実習での体験から、幼稚園実習の準備から実施にかかわるすべてにおいてのものにとらえられた。

そこで、実習指導室での対応として、実習助手はMが来室したときには、丁寧に話を聞くようにした。また、教員はMが大学に来ていることが分かると必ず声を掛けるようにしていた（ある教員は、本人の生活の事情を踏まえ頑張っていることを認め、Mが立ち直ることを最後まで諦めないとの想いを話していた）。

実習助手は、Mが来室した際は、本人の話したいことを最後までできるだけ気持ちをくみ取りながら聞くことにした。第二部（夜間）の学生であったので、夕方来校し、実習前は毎日のように「実習指導室」を訪れた。

時折、準備などで昼に大学へ来ると、「学食へ行きたいが昼の学生がたくさん居り、恥ずかしい」というので、一緒に学食へ買い物に行ったこともあった。

話の内容は実習の話だけではなく、家庭のことなどにも及び、Mにとって「実習指導室」はそうした思いをゆっくりと話せる場所となっていくと考えられる。

実習に関する指導・支援は、必要と思われる取り組みを見通しを持って行った。

例えば、電話の掛け方については、最初に、話す言葉や内容を実習助手が伝え、本人に書き取らせた。電話を掛ける際にはその文を手元に置くようにさせた。

すると、実習前には、「先生、教えて」と訪ねてくるようになった。そこで、Mがそうした段取りを理解したことを見計らい、「M自身で考え、それをメモにし、特に直すところがあったら教える」と話した。最後の実習では、Mが言葉を考え、自力で電話を掛けることができるようになった。

ここで、できるようになったことを認め、「頑張ってきたからできるようになった。これから、就職した際にも電話の掛け方は役に立ってくる。身に付いてよかった」と褒めた。

実習の際の絵本の読み方については、まず実習助手が読んで見せ、注意点を知らせた。Mに「読んでみるように」と言うと、恥ずかしがり読もうとしなかった。

保育所実習での責任実習（2歳児）でのこと。実習園の担当教員より「発達段階を踏まえ、魚の形の画用紙に野菜のスタンプを押していく活動はどうか」、「導入の際に、『にじいろのさかな』を用いてはどうか」と助言があった。その時、Mは「スタンプは行ってみたい。しかし、物語が長いのでどうしたらよいか」と困ってしまった。それに対して、実習助手は「2歳児に読むときは物語を簡単に伝え、絵を見て楽しませる方法をとったり、年少児用に市販されているミニ絵本を使用したりしてもよいのではないかと助言した。Mは「帰りに本屋に寄って探してみる」と言っていた。また、実習助手は、スタンプを行う際の様々な注意点を具体的に伝えた。

何日かして、Mは「先生、保育実習の導入で使う絵本を学校の帰りに買ってきました。見てください」と自ら準備したものを携え「実習指導室」を訪れた。

保育所実習後、Mは「スタンプを使用した責任実習の後に、他のクラスでもスタンプの活動を行ってほしいと言われ、2回行った。成功した」と話し、喜んでいた。

その実習後、Mは自信を付け、表情も生き生きとなってきた。
 「M、変わったね」と友人も彼女を認め、関係も良好になっていった。
 その後、他の実習の準備を自ら行うようになり、実習後には「お時間ありますか」「お忙しい中、ありがとうございました」と、教職員に対する態度にも変化が見られた。
 すべての実習を終えた後、真剣なまなざしで「保育園の就職試験を受けたい」と希望し、採用試験に無事合格した。

【事例2】「一緒に考えようか」

キーワード／「実習に対する不安」「個別指導」
 「教材研究（具体的な準備・指導）」

学生：H 平成21年度入学生

時期：平成22年6月初旬

実習：保育所実習：前半：平成22年6月28日（月）～7月12日（月）
 後半：平成22年8月30日（月）～9月13日（月）

日常、明るく元気にふるまっているH。
 「私は、完璧主義」と本人が言うくらい、一つひとつ慎重に言葉を選び、また、物事に取り組む際には、丁寧に細かく仕上げていく姿がある。
 実習前には「心配だから来ました」と「実習指導室」を訪ねてくる。

保育園でのオリエンテーションの後「実習指導室」にやって来たHは、「どうしよう。余計なことを言ってきたしまった。園の先生に『好きな絵本は何？』と聞かれ、『はらぺこあおむし』と答えた。すると、『本園は『はらぺこあおむし』に力を入れている。ぜひ、その絵本にちなんだ活動を責任実習してほしい』と言われた」と話した。Hは「『はらぺこあおむし』の活動なんて考えられない。どうしよう」と焦っている。

そこで、実習助手と教員とで「一緒に考えましょう」と声を掛け、教材研究（準備）取り組むこととなった。
 「①青虫を使った題材 → ②ねらい → ③手段・方法 → ④展開 → ⑤まとめ」
 を順に考え、それらをもとに、実際にできる内容を検討した。
 磁石を使ってはどうか、画用紙を使ってはどうかなど、様々な道具や方法を考えた。
 一つアイデアが思いつくと、そこに必要な配慮等を考え、一層構想が具体的になっていく中で、Hは「この部分を大切にしたい」と話すことができるようになった。
 Hは、実習開始まで、何度もアイデアを見直し、一つひとつの声の掛け方などを丁寧に検討し、それを園に持参し、実践につなげた。
 実習後、Hは報告に訪れ、「園の先生と相談をし、何点か直したうえで実施をしました。活動は成功しました。ありがとうございました。困ったときの実習室です。」と述べた。
 Hは、その実習園から就職の話をいただき、採用に到った。

Mの事例（【事例1】）において、当初、Mの学生生活は決して良好なものとは言い難い状況であり、実習の準備も順調に進んではいない。こうした学生には、単に実習指導という面からだけではなく、生活に対する態度やモチベーションの改善や維持などへの配慮をも行うことが必要であると考えられる。

そこで「実習指導室」での指導・支援を適切に行うためには、学生の氏名をはじめ、通学や修学の状況、遠方に住まいのある学生の把握、個々の実習先の把握、提出物の状況等を念頭に

置きながら、学生の生活の様子や内面の変化に早く気づき、必要に応じた声掛けや対応を行うことが必要となる。また、事例からも何うことができるように、実習だけにかかわらず、普段から些細なことも相談したり話したりできる関係作りを心掛け、学生の来訪しやすい「実習指導室」の運営を講じることが大切と考えられる。

Hの事例（【事例2】）において、Hは実習を控えて、その準備を「具体的にどうしたらよいか」と迷っている。このような迷いや具体的に取り組みが思いつかないことなどが不安の要因とな

っていると考えられる。

この場合の「実習指導室」における指導・援助では、「まず実習生自身の実習目標（課題意識）や、ねらいを明確にし、個人の実態に応じて、順序立てた説明で、分かりやすく具体的なアドバイスをを行うこと」を心掛けている。特に、事例において実習助手の果たした働きの特徴は、「一緒に考え」「一緒に作り上げる」ような「具体的ななかかわりを活かした援助」を講じたことにあると考えられる。

Ⅲ. 考察

1. 学生の「実習指導室」の利用理由・目的と対応

学生へのアンケートの結果から、各実習に取り組む際に、学生は「実習指導室」で個人レベルで指導を受けたり相談したりしていることが分かった。また、学習や相談だけではなく、実習に際して抱く不安や心配ごとを解消・緩和する目的で「実習指導室」を訪れ、利用する場合があるということが明らかになった。

つまり、学生は目的・理由が達成されることを期待し、「実習指導室」への来訪に当たっては不安や課題の解決を予期していることになり、この意味で、これらの理由が達成されない場合には、少なからず、学生の中に不安や課題の未解決状態を残すことになる。したがって、いずれの理由においても、「実習指導室」を訪れる際の学生には、具体的な課題や不安を解消する機能への期待という共通した心情があり、対応としての指導・支援はそれらを察するものであることが要求されると考えられる。

また、少数ながら「先生とのかかわり、相談」という回答から、学生にとって「実習指導室」における対応や指導・支援とは、対応者の存在を前提とする人間的な働きであるととらえることができ、同様に、他に掲げられた「相談」「提出物」「報告」「不安を解消する」などの理由・目的も、対応者の働きを予期し、解決を期待する各個人のイメージによって規定されていると考えられる。

「実習指導室」における対応者の人間的な働きへの期待と予期という学生の心情は、「実習指導室」にかかわる経験の中で自然に培われたものであると考えられる。学生の「実習指導室」を利用する機会は各実習に涉っており、こうした実習に関係

する学習経験の中で「不安を解消する」ことで「安堵感」「安心感」を得ることができたと考えられる。

2. 「実習指導室」の機能における「横断性」

実習ごとの指導という専門的な個々の領域がもたらす様々な状況や困難は、共通した対応が可能な「実習指導室」という働きによって解決・対応され、その働きに対して学生は、「相談や、不安の解消」などの効果を期待していると考えられる。この意味で「実習指導室」は、実習の各領域を行き来する学生の心情や通底する内面の状況に 대응できる人間的な働きの展開を可能にする場としての性格を持っていると理解することができる。

ところで、人間的な働きが期待される「実習指導室」において、学生は学習者として各専門領域を行き来する横断者であるが、各実習にかかわる業務の中で、その専門的な領域を行き来する実習助手もまた、対応者としての性格を携えた横断者であると言えよう。「実習指導室」における多岐に渡る業務内容は主に実習助手において集約され、事例に見られるような学生との具体的な対応は、学生の実態の理解や日常的なかかわりをベースとした働き掛けである。こうしてみると、「実習指導室」の機能における「横断性」は、細分化された専門的な学習領域を総合的に再構築し、人間的なやり取りの中で指導・支援として働くものであると位置づけることができよう。結局、「実習指導室」における横断者同士のかかわりを理解する視点の形成が、保育者養成における保育実践力の育成の解決の手掛かりになるのだと考えることができる。

Ⅳ. さいごに

1. 課題

学生が実習に向けて使用するテキスト⁷（平成18,19,20,21,22年度）においても、様々な準備や実習園との連絡が“「各養成校で」行われる”と示されている。しかし、その手順の中では、「各養成校」の働きについては具体的に示されてはならず⁸、むしろ実際の指導場面でその担い手が具体的な人物（実習助手や特定の教員）として語られ、その機能が学生の経験によって理解されることで、指導・支援の機能が具体的、個別的な展開に任されてしまうことになる。

これまでの考察を通して、専門性によって細分された複数の領域を横断する学生の存在を受け止める、特殊な“交差領域”としての「実習指導室」と、

そこで指導・支援を展開する実習助手や教員の存在と学生に対するかかわりの有効性を認めることができた。しかし、「実習指導室」の「横断性」が包摂する領域の広がりについては十分に検討されておらず、今後、「実習指導室」そのものを構成する人員の特性や、そこで交わされる情報、外部の機関とのつながり等を明らかにし、「横断性」の本質を明確にする必要がある。

2. 人間的な働きへの眼差し

「実習指導室」を利用する学生の目的や理由の前提としての、不安感やその解決への期待感、学習内容の理解や解決に対する指導・支援だけではなく人間的なかかわりそのものを求める心情と理解することができる。今後、実習指導、そして「実習指導室」に必要とされるのは、学生の不安を察し、かかわりの中で期待に応えることができる指導の質と体制作りであると考えられる。その具体的な姿としては、各実習担当の教員が「実習指導室」に滞在する（存在する。そこに在る）ことなどが考えられ、「実習指導室」の経営方針としてはまず「指導方針の明確化」「教員や実習助手間の情報交換と共通認識、そして連携」などが考えられる。

しかし、学生の要求の基底にあるのは、専門的な領域における出来事をきっかけとした内面的な問題の解決であり、対応は、この細分化された課題を背負って立つ一人の人間の内側にこそ目を向けたものでなければならない。学生の学習状況への理解はそれぞれの教員が認識する情報によるが、実習の指導・支援に当たっては、対応者が学生自身にかかわる様々なエピソード（学生自身の生活、学習状況、教員や実習助手とのかかわり）をもとに、学生の横断者（「生活者」）としての育ちを理解し、その時々学生に合った指導を工夫、展開していくことが大切であると考えられる。（了）

脚注

- (1) 金子・藤井「保育実習の事前体験学習としてのボランティア活動ー活動の実際とその効果」『埼玉純真女子短期大学研究紀要』.1998. pp1-43
- (2) 安部, 石山「埼玉純真短期大学研究論文集 2008」. 埼玉純真短期大学. 2009. pp3-8
- (3) 安部, 石山「埼玉純真短期大学研究論文集 2008」. 埼玉純真短期大学. 2009. pp3-8

- (4) 安部, 石山「埼玉純真短期大学研究論文集 2008」. 埼玉純真短期大学. 2009. pp3-8
- (5) 本学では、「実習指導室」に実習助手（常勤）が1名配置されている。
- (6) 実習委員長ほか各実習担当者、実習助手で構成され、実習運営に当たっている。
- (7) 田中まさ子編「改訂 幼稚園・保育所実習ハンドブック」. みらい. 2010
- (8) 実践研究幼稚園では、別途授業用資料（ワークシート）を活用している。